

報 告

近畿病院図書室協議会第37回勉強会 参加記

鹿島久美子

院内でがん登録をしている診療情報管理士から、ICD-O（国際疾病分類腫瘍学）の本が使い込んでぼろぼろになってしまったため買い替えてほしいという要望を受けて、一冊購入した。こちらに図書を補修できる技術があれば買い替える必要はなかったのにと悔しく思っていたところ、ちょうど良いタイミングで協議会から「製本と補修の実習を行う」という案内を頂き、参加することにした。

講師の藤原先生によれば、日本の若い人がお筆を習うところを西洋では製本を習うのだという。書物を手入れして長く使う文化は美しいと思う。今回の勉強会でも、参加者の子どもさんの愛読書だという読み込まれたアンパンマンの本に、新しい表紙がついて丈夫できれいな一冊に甦るのを目の当たりにして、その場に居合わせたことが嬉しかった。

さて、現実に関自分がそのような補修技術の使い手になるために必要なのは修練である。当日、藤原先生のご指導を受けつつ人生で初めて作ったハードカバー文庫本（図1）を職場で披露したが「えらくでこぼこしてる」と酷評された。先生が今回の製本材料を復習用にもう一組持ち帰らせてくださったことに、技術を継承したいという親心を感じる。現場で役立つレベルを目指して精進したい。

……精進するべく製本の材料も売っていると教わったホームセンターに足を運んだが、ぴったりにくる材料がうまく見つけれなかった。花

布や寒冷紗は図書館用品として流通しているが、販売されている単位だと小規模な病院図書館では余るし、入門者には布の表裏の区別すらつかない。「いちようごて」は各家庭のアイロンで、手締機は各自の体重で（笑）代用可能としても、使い方のコツをつかんだ人からの直接指導がなければ使いこなすのは難しいだろう。材料や道具を共同購入して保管しておき、年に一度ほど補修が必要な本を持って集まることができれば良い（その場に藤原先生がいらっしゃればなおありがたい）と夢想する。

それにしても、病院図書館の担当者は紙資料の扱いから電子資料の管理までこなせるオールラウンドプレイヤーであることが要求されるのを、日々の業務で痛感する。いろいろと勉強せねば、と改めて思った京都での一日だった。

藤原先生、研修部の皆さま方、ありがとうございました。

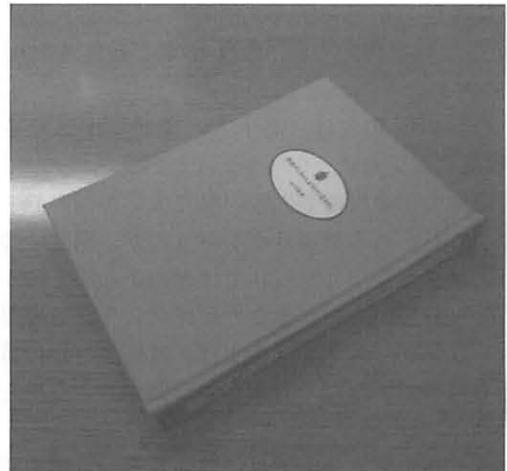


図1 人生ではじめて製本した文庫本